

說

苑

通貨統制の目標としての貨幣所得の安定

——ダービン説の批判——

大野純一

開題

景氣變動の終局的原因が果して貨幣の側に存するか、それとも又財貨側に在るかといふことに就ては意見の岐れるところであるが、戦時戦後のインフレーション時代や金本位復歸後のデフレーション時代を経験した今日、貨幣が景氣の動きに對して大なる作用を營むといふことは何人も否定しないであらう。従つてまた、通貨の適當なる統制によつて景氣の變動を緩和し得るといふことも否定することは出來ぬ。近時、景氣政策として

通貨統制の目標としての貨幣所得の安定

の通貨統制が強調せられるに至つたのは蓋しかゝる事實の認識に基づくのである。

景氣現象が——その原因が何處に在るにもせよ——經濟發展の途上に於ける各部門間の均衡の攪亂とその適應過程であるといふことは、何れの景氣學說によつても認められるところの共通の認識である。故に景氣政策としての通貨統制は通貨の調節を通して經濟の發展を均衡的ならしめんとするところにその使命を有する。然るに、「貨幣にあつては質は専ら量から成り¹⁾」、「貨幣に於て生活の偉大なる傾向の一たる質を量への還元が最も外面的な而かも最も徹底的な表現にまで達してゐる²⁾」が故に、通貨の統制は結局發展的經濟の各部門間に均衡を保たしむる様通貨の數量を調節することを以てその任とするのである。

然らば通貨統制は、この使命を果すためには、何を目標としてその數量を調節すべきであるか。かゝる目標が具體的に把握されて始めて現實の通貨統制は可能となる。然るに、この點に關しても學界に意見の一致がない。從來提案されたものは物價水準の安定と有効貨幣量の安定即ち中立貨幣の二であつて、兩説は互に甲論乙駁の状態に在つた。然るに最近に至つて之等に對立するものとして貨幣所得の安定が提唱せられるに至つた。前二者に就ては嘗て他の機會に論評したことがあるので、³⁾こゝではその際觸れなかつたところの通貨統制の目標としての貨幣所得の安定を紹介し、批判することとする。

通貨統制の目標を貨幣所得の安定に求めんとする最初の人は、私の知る限りに於ては、E. F. M. Durbinである。ダービンは嘗てオックスフォード並にロンドン兩大學の Scholarship たりし逸材であつて、現にロンド

1) G. Simmel, Philosophie des Geldes 1923. S. 269.

2) Simmel, a. a. O. S. 294.

3) 拙稿「通貨統制の目標に就て」、經營學講演集「産業統制研究」5—15頁。

ン大學の講師の地位に在る新進の經濟學者である。その主著は Purchasing Power and Trade Depression 1932 であり、他に Socialist Credit Policy 1933, Money and Prices (in "What Everybody Wants to Know about Money". 1933 Edited by G. D. H. Cole) 並に the Problem of Credit Policy 1935 等がある。茲では之等の中に現れたる彼の提案を中心として論述することにしよう。

一、ダービンに於ける貨幣循環の様相

ダービンは、「貨幣は常に經濟組織の内部を循環して來たのであるが——即ち貨幣は生産者から消費者へ行きそこから又生産者へと戻つて來たのであるが——この事實こそ貨幣的機械の操作を理解するのに最も大切なことである¹⁾」と考へる、故に貨幣を如何に操作すべきかといふ中心の問題に觸れるに先立つて貨幣循環の様相に就ての彼の解剖から窺ふことにしよう。

ダービンは、靜的經濟社會、彼の所謂貯蓄の行はれない經濟社會に於ては社會の所得總額は生産費總額に等しいといふことを以て、「貨幣循環に關する最も單純にして最も根本的な事實である²⁾」とする。「今假りに産業が總ての商品を製造し總ての生産要素を雇入れかつ總ての最終生産物を賣却する唯一人の生産者によつて經營せられるものとすれば、彼にとつての費用たるものはすべて何れかの消費者の所得の一成分をなす、といふことは勿論明かである。彼にとつての一費用たる地代は同時に土地を彼に賃貸した人の同額の所得である。雇

1) Money and Prices, p. 319.

2) Money and Prices, p. 319.

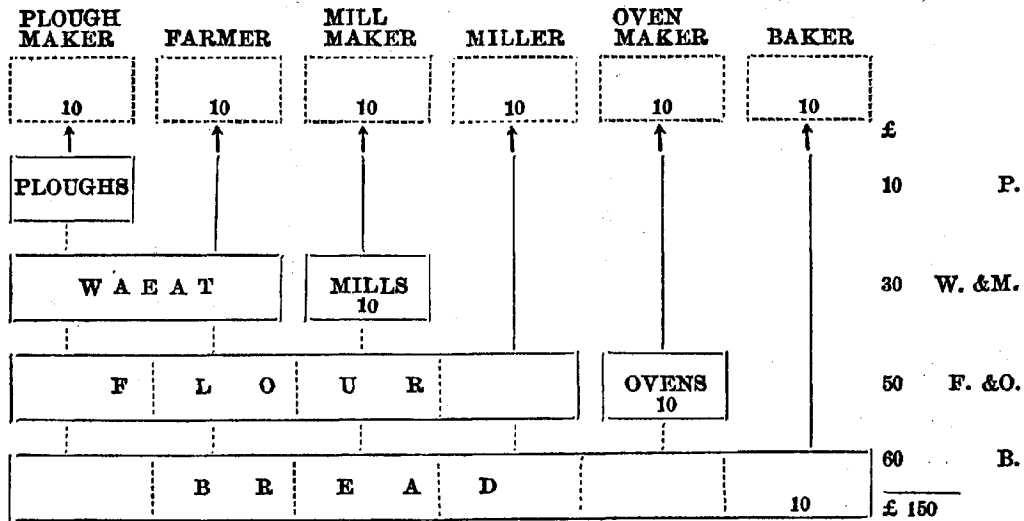
主たる彼にとつて一費用であるところの貸銀は貸銀收得者の所得である。彼が銀行や社債権者や世の常の株主に支拂ふところの利子は之等の種々なる法的請求権者達には同額の所得である。之等の個々の成分に就て眞理たることはまたその全體についても眞理である。この單純な産業組織から放出されたあらゆる消費者の所得總額は生産費總額に等しいであらう、何となれば、之等の費用額の各成分は同時に何れかの消費者所得の成分を構成するから。³⁾

右に述べたダーピンの所論は決して彼に固有なものではなく古くから均衡理論を説く殆んどすべての經濟學者によつて抱かれて來た思想である。

然るに、「産業が唯一人の生産者によつて經營せられる」といふ假定を取り去つて、議論を一步現實に近づかしめるならば、「社會の所得總額は生産費總額に等しい」といふ命題は、彼によれば、當然修正されなければならぬ。現實の社會に於ては、「貨幣は必ずしも生産者と消費者の間を移動し再び生産者の許に歸るといふ單純な道を進るものではない。もつと複雑なのである。多くの而かも最大のすべての支拂は決して生産者と消費者との間に在るのではなく、生産者と生産者との間に行はれるのである。もしも吾々が何れか任意の生産單位をとつて檢するならば……その生産費の一部分丈けが……貸銀地代利潤の形で消費者に支拂はれることを知るであらう。そして他は原料代——石炭、鋼板、木材、電氣裝置、ペイント、柔皮、運送其他彼の使用する中間生産者の代價として他の生産者達に支拂はれるであらう」、換言すれば、「どの貨幣單位も最終の消費者の許

3) Purchasing Power and Trade Depression, pp. 47—48.

通貨統制の目標としての貨幣所得の安定



に達する前に十數回も生産者から生産者へと経過して行くであらう。⁴⁾ かくるところに於ては、「生産者の費用と消費者の受取分との間には最早単純な関係はない。反對に生産者の支拂總額は消費者の受取分を遙かに超過しなければならぬ。……消費者の所得は當然生産者の貨幣生産費總額の一少部分に過ぎない。」⁵⁾ 而して、「それは消費財の生産費に等しいのである。」⁶⁾

この點を彼は Hayek の圖式を借りて次ぎの様に説明する。「今假りにパンの生産には四つの段階があり各段階はそこで使用する労働と機械とに同額を支拂ふものとする。然るときは費用の構造を上掲の圖式で表はすことが出来る。

「もし各單位を一〇ポンドなりとすれば、この圖式から次ぎのことが明かとなる、即ち

一、費用總額は總ての生産段階を表はすところの面積内の單位類に等しい、即ち $£60 + £50 + £30 + £10 = £150$ に等しいといふこと、

二、併し常に各段階の一部分だけがそこから終局の消費者に渡される

4) Money and Prices, pp. 319—320.

5) Money and Prices, p. 320.

6) Purchasing Power and Trade Depression, p. 53.

といふこと——今の場合にはその部分は一五〇ポンドの中僅かに六〇ポンド丈けであるといふこと、

三、それにも拘らず斯く渡される額は常に消費財の生産費総額に等しい、何となれば、それも亦六〇ポンドだから、といふこと⁷⁾」

されば、迂回生産が行はれ生産段階が獨立の生産者によつて經營せられるところでは、ダービンの考を以てすれば、社會の所得總額は生産費總額に等しいのではなく、たゞ消費財の生産費總額に等しいのである。

一部の景氣論者は⁸⁾既にこの事實を目して經濟的均衡を攪亂するものなりと主張するのであるが、我がダービンは「消費者に販賣さるべきものはたゞ完成財の生産高丈けである」から消費者所得は生産費總額に等しきを要するものではなく消費財の生産費總額に等しきを以て足ると稱し、かゝる事實は決して均衡を亂すものではないと説くのである。

以上は靜的經濟社會に於けるダービンの貨幣循環の様相である。更に進んで動的、發展的經濟に於けるそれを觀察することにしやう。

こゝに動的、發展的經濟といふのは資本蓄積の行はれつゝある經濟社會のことであつて、ダービンの用語を以てすれば、*an economic system in which there has been a steady rate of new saving*⁹⁾のことである。そして、そこでは「新資本が可能ならしめるであらうところの生活水準の向上を計る爲めにその所得の一定割合を

7) *Purchasing Power and Trade Depression*, pp. 54—55.

8) 例へば *Major Douglas*.

9) *Socialist Credit Policy*, p. 19.

國民が節約せんと決心してゐるのである。¹⁰⁾「一見かゝるところでは消費者の（消費財への）支出と消費財の生産費との間に不均衡が生じ、こゝに直ちに經濟一般の均衡の攪亂が生ずるが如くに思はれる。否、事實一部の消費過少説は景氣變動の原因をこゝに求めんとしてゐる。若しも節約の行はれない場合に消費者の所得總額が消費財の生産費總額に等しいならば、何幾かの所得が節約されて消費財の買入に支出されないとすれば、當然の結果として消費者の支出總額はそれだけ消費財の生産費に不足する筈である。換言すれば、消費財の價格はその生産費以下に下落する筈である。

併し、ダービンはこの所論に反對する。彼によれば、「社會的貯蓄過程を検するに當つて、消費財への貨幣の使用を節制するといふ最初の而かも純消極的な過程のみに注意を向けるといふことは大なる誤謬である。貯蓄の終局的結果を理解せんとするならば、この節制がその單なる前奏であるところの實物生産資本への投資過程を考察し、特に投資が消費財の生産費に及ぼすところの効果を吟味しなければならぬ。¹²⁾」「貯蓄は、それが投資される限り、¹³⁾「結局消費財を生産するところの資本要具を増加し或はその質を改良するために用ひられなければならぬ、」換言すれば、投資を伴ふ貯蓄は資本蓄積の増加を齎らす。然るに、「資本蓄積の全目的は既存の勞働と自然的資源とが各種の完成財を生産する力を増加するといふことに在る。若しも原始的な社會に於て人が彼の時間の一部をさいてポートを建設し網を作るために使ふならば、この資本蓄積の目的は勞働の全期間に亘つて日々獲得する魚の量を増加するといふことに在る。斯くて個々の魚族を捕獲するに要する時間と疲

10) Socialist Credit Policy, p. 19.
11) 例へば Hobson, Foster and Catchings.
12) Socialist Credit Policy, p. 19.
13) Socialist Credit Policy, p. 19.

勞とが、即ち、實物生産費が永久に低減するのである。同様に社會の資源の一部がホームスパンの手織直接生産から鐵鑛の採掘や鋼鐵の溶解や動力織機の形態に於ける新實物資本の製作やに移轉せしめられるならば、かかる蓄積の全目的は直接、間接布の生産にたゞさはる全労働者をして一人當りの完成布の平均生産高を増加せしめるといふことに在る。この結論から明かになることは、一人當りの貨幣賃銀が不變でありかつ土地及び原料の價格に騰貴する傾向がないならば、この物的能率の増進に伴つて丁度平行して貨幣費用が低減するであらう、といふことである。若しも蓄積の結果社會が同總量の有効的労働と自然資源とを使つて一〇パーセント丈け多くの實物生産物を……獲得するならば、明かに平均生産費も亦單位毎に一〇パーセント丈け低下するのであらう。……斯くて一般に資本創設の結果完成品の物的生産高が増加しその貨幣生産費が低下するのである。¹⁴⁾「それ故に、價格の下落と同じ速度で生産費も低下する、従つて均衡の要求するが如くに何れの點に於ても總生産費は總價格に等しい、而して貨幣經濟に於て均衡が保たれるのはこの事實を通してある。¹⁵⁾」(譯者圈點)

斯くてダービンは貯蓄は根本に於て均衡を亂さずと主張するのであるが、こゝに忘れてならないことは彼のこの所論には二つの前提があつたといふことである。それは右の文章に於て私が圈點を附して置いた事項であつて、一は「貯蓄が投資せられる限り」といふことであり、他は「一人當りの貨幣賃銀が不變であり云々」といふこと即ち社會の貨幣所得が一定であるといふことである。後者の前提は問題の中心であつて後に再び接する機會があるであらうから、こゝでは第一の前提丈けについて今少し詳論を聞かう。

14) Money and Prices, pp. 321—322

15) Money and Prices, p. 322.

若しもこの第一の前提がそのままに放置されるならば、彼の所論は貯蓄は必ずしも均衡を破るものではないといふ消極的な主張にはなるが、必ず亂さぬといふ積極的な證明とはならぬ筈である。そこで、ダービンは市場に於ける金利存在の事實を持ち來つて貯蓄は現實に投資せられるといふことの生きた證明であると解し、その主張に積極性を與へんとするのである。彼は曰く、「市場に實際的金利が存在する以上、そこに貯蓄に對する實際的需要がある。貯蓄に對する實際的需要は之を利用して新生産物の費用總額と價格總額との間に充分ヨリ大なるマーヂンを得るであらう様な新生産方法を開始し得る生産者達からのみ生ずるのである。之等の額が拂戻されるときには彼等は生産高の増大が既に齎したところの價格の下落を既に經驗してゐなければならぬ。彼等は貯蓄を需要するときにはそれを考慮しなければならぬ、そしてヨリ高い實際的市場利率を支拂ふときは、單に費用たる金利を支拂ひ得る許りではなく、市場に於ける生産物の價格の下落にも耐え得る程充分な單位生産物の生産費の低下を齎らしてゐなければならぬ。……之こそ消費財の販路を閉鎖することなしに貯蓄が行はれ得る方法の説明である、」¹⁶⁾と。

以上がダービンに於ける貨幣循環の説明である。

二、ダービンに於ける通貨統制の目標

扱て、それでは發展的經濟の均衡を維持するが爲めには何を目標に通貨量を統制す可きであるか。この點に

16) Socialist Credit Policy, pp. 21—22.

ついでダービンの積極的提案を聞く前に従来通行の二説に對する彼の批判を先づ紹介しやう、蓋し、それによつて彼の提案自身がヨリ良く了解され得るであらうから。

既に私が他の機會で述べた様に、従来通行の最も一般的な常識的な通貨統制の目標は物價水準であつた、即ち、物價を安定せしめるやう發展的經濟の生産量の増加に應じて通貨量は増發されなければならぬといふのがそれである。併し、彼はこの種の通貨統制を以てそは *hidden inflation* を惹起せしむるものであつて、そここそ景氣變動の一般的原因が潜むと評して眞向から之を排撃するのである。曰く、「既に論じた様に、資本蓄積の結果、一組の本源的生産資源から生産される完成品の總生産高が増し、斯くて平均生産費が低下する。然るに、價格の安定策がとられるならば、この生産費の低下は定義に従つてそれに應ずる物價の下落を伴はない。故に物價の安定策が追はれる限りは、生産費は益々價格以下に低下し、生産物一單位毎の利潤即ち費用以上の價格の剰餘は益々多くなるであらう。かつ新信用が生産者から消費者へ渡つて行くなれば貨幣賃銀の水準が高まるので物價水準それ自身統制し得ないやうになるであらう。物價は繼續的に生産費以上に騰貴する傾向がある、生産擴張のために貨幣の需要が不可避免的に増加するであらう、何故かなれば、かゝる生産は益々大なる純利潤を産むからである。それ故に、一般的インフレーション状態が展開するであらう……」¹⁾と。併し、このインフレーションは、彼の考を以てすれば、必ず行き詰りを生ずる。「貨幣所得の總額が増加するにつれて消費者はヨリ多くの現金を必要としかつ之を保持するに至るであらう、……故に一定期間の後には現金が銀行から引

1) Socialist Credit Policy, p. 25.

出される、そして銀行は累積的な信用の擴張を停止するの止むなきに至るであらう……」²⁾又假令銀行の自衛手段が講ぜられずして紙幣の印刷によつてこの現金需要が充たされるとしても尙、彼によれば、行き詰りは避け得ない。「新貨幣放出の割合は増加するが技術的な能率増進の割合は恐らくは増加しないであらう。故に、或時期以後は貨幣放出の割合は當時の物的生産増加の割合よりも大とならざるを得ない。その點以後は物價は騰貴せざるを得ない、そして後期インフレーションが始まるであらう。然るときは、ファンタスティックな高さになるまで物價騰貴を放任して通貨制度を破壊するか、もしくは信用膨脹の割合を停止するかせざるを得ぬであらう。」³⁾そして、彼によれば、信用擴張の停止は、その何れの場合たるとを問はず、一般的信用恐慌から不況へと經濟社會を導くのである。⁴⁾

斯くてダービンは物價安定を目標とする通貨統制はそれが元來克服すべき使命を有する景氣現象を逆に發生せしむるといふ矛盾を藏すると考へるのである。

それでは今一つの目標、即ち貨幣流通量を常に一定に保たんとする中立貨幣に對しては如何なる考を彼は有してゐるか。

ダービンによれば、發展的經濟に於て若しも通貨總量を一定ならしめるならば、物價は二つの原因から下落するのである。「先づ第一に物價は生産能率が増進し物的生産量が増加するが爲めに下落するであらう。……併し、既に述べた様に、このタイプの物價の下落は失業を發生せしめたり生産の合理的利潤を傷つけたりする

2) Money and Prices, p. 331.

3) Socialist Credit Policy, p. 27.

4) Socialist Credit Policy, p. 26.

The Problem of Credit Policy, pp. 112—117 参照。

ものではない。生産費は定義に従つて物價と同じ割合丈け低下したのであるから物價と生産費の一般的マージンは同一に保たれるのである。⁵⁾ 故にこの種の物價下落は經濟の均衡を亂しはしない。「しかし、物價下落の第二の原因に就てはそうではない。事實貨幣量を一定に保つならば、物價は生産増加のため許りではなく消費者所得の減少のためにも下落するであらう……⁶⁾」「資本の蓄積は結局生産の複雑性を増し、中間生産物の生産のための生産段階の數や資源の割合や時間の量やを増す傾向がある……その當然の結果として、一定貨幣量中の益々多くの割合が之等中間生産物の生産者達によつて保有せられ、益々少い割合が消費者達によつて保有せられる……そして、若し貨幣總量が一定であるならば、物價は生産能率が増進する爲め許りでなく消費者の受取る所得が減少する傾向の爲めにも下落するであらう。私の確信するところによれば、物價下落のこの第二の原因は貨幣的均衡の利益に正しく反するのである。」⁷⁾

それでは何故かゝる物價の下落は均衡を破壊するのであるか。元來貯蓄が均衡を維持するのはそれが投資せられて物的新資本財に費されるからである、之に反し若しもそれが斯くの如くに費されないならばその貯蓄に相當する丈けの貨幣額が積極的な循環過程から引抜かれて茲にデフレーションを生じ價格總額は生産費總額以下となつて生産機構を害するのである。然るに、彼の考を以てすれば、「……貯蓄期間の延長から生ずる消費者所得の減少は實際の貯蓄よりもヨリ少くが新資本に費された場合の一に過ぎないのである……。益々複雑化する生産組織を運用するための貨幣額が益々大となるに従つて、その時々貯蓄された貨幣の一部分が物的

5) Money and Prices, pp. 332—333.

6) Money and Prices, pp. 332—333.

7) Money and Prices, pp. 333—334.

新資本を造り上げる爲めではなく……單にヨリ複雑な生産組織が要求する特殊の取引を金融するための付加的貨幣を供給するのに用ひられなければならぬ。これは明かにデフレーションの原因である。生産者の生産費を構成した貨幣の一部が消費財にも生産財にも費されずして、單に生産組織の内部に保有されるバランスとなつたのである。故に貨幣所得のその水準で物價は下落し失業が結果するであらう。かゝる事情は貨幣的均衡の維持に合致しない、それは信用の擴張によつて防ぐ可きである。⁸⁾」

斯くてダービンは中立貨幣論者にも共鳴することが出来ないのである。

それでは彼自身の提案は？ 彼によれば、正しき通貨政策は中立貨幣主義や物價安定主義の陥つた様な短所から免れなければならぬ、従つてそれは「一方に於ていたまじき所得デフレーションを避けると共に他方に於て利潤インフレーションを防ぐであらう様な政策⁹⁾」でなければならぬ。そしてそれは一人當りの消費者所得の安定を目指すところの通貨統制である、と彼は主張する。

既に紹介した様に、彼によれば、發展的經濟の下に於ては資本蓄積の結果生産段階が増加しその内部に保有せられる通貨量が比較的増加する、従つてそれだけ消費者の貨幣所得は減少する傾向を有するのである。故に貨幣所得の安定を目標として通貨統制を行ふものとすれば、それだけ通貨の増發が必要となる。併し、彼の考によれば、この種の通貨の増發は決して利潤インフレーションを齎らすものではなく、寧ろ之れなき場合に生ずるところの所得デフレーションを防ぐ効果があるのである。¹⁰⁾ 勿論、一人當りの貨幣所得を安定せしめるな

8) Money and Prices, p. 336 The Problem of Credit Policy, pp. 120-129 参照。
9) Purchasing Power and Trade Depression, p. 175.
10) Socialist Credit Policy, p. 28.

らば、消費財の物價水準は下落するであらう、何となれば、資本蓄積、生産能率の増進の結果生産量が増加するからである。併し、彼はこの物價下落は何等均衡を亂すものではないと観る。「之等の諸價格は先きに貨幣生産費が低下した後に、またその故にのみ下落するのである、そしてヨリ低い之等の價格で消費財の生産高の總てが販賣され得るであらう。」¹¹⁾ 故にかゝる物價の下落は生産者の利潤を減じはしない。又「到るところで、同一の總生産費でヨリ多くのものが生産されるであらう。何人も同一の、殆んど同一の貨幣所得を受領するのではあるが實物所得は常に増加するであらう、何となれば、常に完成品の物價が繼續的に下落するから。」¹²⁾ として、「消費者達はヨリ能率的な資本を蓄積することによつて可能となつた實質的生活水準の向上を享受するであらう。」¹³⁾

斯くて彼は所得の安定を以て發展的經濟の均衡を保つための唯一の通貨政策であると論ずるのである。但し、彼はこの政策の實施にはたゞ一つの心理的な短所があることを告白する。曰く、「貨幣所得を増す代りに物價を引下げて生活水準の向上を計るといふことには、他面に於て、心理的な短所がある。……購買する商品價格の僅少の下落も之を實際に寄せ集めるならば同割合の貨幣所得と同じことになるであらうといふことは誰れも實際に信じない……これが所得の安定策を實施するに際しての實際的短所である、しかし、假裝的インフレーションを——並にその結果たる恐慌と不況とを——避ける唯一の方法はこの政策である、と私は信ずる者である。」¹⁴⁾

11) Socialist Credit Policy, p. 28.

12) Socialist Credit Policy, p. 28.

13) Purchasing Power and Trade Depression, p. 176. 尙 The Problem of Credit Policy, p. 128. 以下參照。

14) Socialist Credit Policy, p. 29.

三、ダービンの批判

以上私は通貨統制の目標としての所得の安定が如何なる理論的基礎を有するか、またその提案の内容はどうであるかといふことを紹介し終へた。之を要するに、經濟の均衡を保つためには生産者が賣上代として受取るところの通貨量と生産費として支出するところの通貨量との間に均衡が持續されなければならぬ。然るに貯蓄と投資が行はれる發展的經濟に在つては一方に於て能率増進の結果單位生産物の生産費が次第に低下すると共に他方に於て生産の迂回期間が延長する結果消費者の所得が次第に減少する傾向がある。従つて、通貨總量が一定であるとすれば、生産者が受取るところの通貨量即ち物價は彼が支出するところの通貨量即ち生産費以下に降る恐れがある。故に經濟の發展を均衡的ならしめるが爲めには、年々生産組織内に吸収せられる額丈けの新通貨を増發し以て貨幣所得の減少を防ぎそれによつて生産費の低下と同じ程度の物價の下落を保證するやう努めなければならぬ、といふのである。

發展的經濟を前提する限り、物價安定主義は單に生産段階の増加によつて生ずる消費者所得の減少を防ぐ許りではなく更に能率の増進によつて生ずる生産量の増加にも順應する爲め新通貨を増發することを要求するのであるが、ダービンは、之に對して、後者の目的の爲めの通貨の増發は之を有害なりとして拒け前者の目的のための新通貨の發行を行ふ可しと主張するのである。

又中立貨幣論者が生産量増加の結果許りではなく所得の減少によつても生ずる物價の下落を許容するのに對して、ダーピンは前者の物價下落は之を是認し後者のそれを否定せんとするものゝ如くである。

かく見るとき、貨幣所得の安定は物價安定主義に對立すると同様に中立貨幣主義にも對立するが如くに見へるのである。併し乍ら、卑見を以てすれば、こゝに紹介したダーピンの所論と中立貨幣主義——少くともダーピン自身が問題とする Hayek の中立貨幣主義¹⁾——との間には、その目標に關する限り、根本的な相違はない。何故であるか。それはハイエークに於ける「貨幣量」概念の中には貨幣取引係數や流通速度が含まれており、従つてハイエークに於ては「貨幣量」を一定ならしめることゝ生産段階増加の結果たる消費者所得の減少を補充するといふことゝは決して矛盾しないから、否それを要求するからである。さればハイエークは曰く、「從來異なる二つの生産段階即ち例へば紡績と機織との段階を統一してゐた企業がそれ〴〵の生産段階に對應する二つの獨立の企業に分離する場合から検討しよう。これ迄絲が紡績工場から機織工場へ移轉するには貨幣を少しも必要としなかつたが、今やこの移轉は貨幣と引換の購入に據つて爲される事になる。これ迄大企業の一部として唯賃銀等の支拂の爲め貨幣を必要とするに過ぎなかつた新機織企業は、今や絲を買ふ爲めに付加的貨幣量を必要とするに至り、絲の所有者——この所有者が舊企業から機織工場を買つたと假定しやう——は斯様な支拂をなす爲めには、工場の購入及びこれ迄工場の經營資本として使用してゐた貨幣量の償却に必要な數量以上の付加的資本を必要とするであらう。而して新らしい貨幣が流通市場にない場合には、新企業はこの額に相

1) Purchasing Power and Trade Depression, p. 173.

當する貨幣量を他の使用方面からとつて來るか或は新節約をこの目的に使用せねばならぬであらう。而して前の場合には資本財貨の需要が絶對的に減少し従つて又生産工程が收縮する事になり、後の場合には迂回生産の長期化が不可能になるであらう。……。けれども新企業の付加的貨幣に對する需要が直ちに新貨幣の發行に據つて充足されるとすれば、斯かる貨幣流通量の變動は需要の方向を變動することなく、唯現存の均衡を維持するに役立つ事であらう。

「……上に述べた事から次の結論が十分當然に誘導される事になるであらう、即ち全體の財貨の流れと貨幣取引を媒介として運動する部分との比例關係を試みに『貨幣取引係數』と呼ぶならば、この係數の變化を原因として貨幣需要が變動する場合、價格組織及び生産の構造に對し貨幣を中立に維持する爲めには、右の貨幣需要の變動に對應して貨幣量を變化する必要があると言ふ結論がそれである²⁾」と。又曰く、「貨幣が諸價格に對して中立である爲めには貨幣流通速度の變化はそれに反對する流通貨幣量の變化で補整されねばならぬ……」²⁾と。故にハイエクに於ける「貨幣量」を一定ならしめる爲めには、生産段階増加の結果として生ずるところの所得の減少は當然ダービンの意味する現實的貨幣數量の増加によつて補充されなければならぬのであつて、ダービンの所得の安定は歸するところ中立貨幣論者の目標に合致するのである。

それでは貨幣所得の安定によつて果してダービンの豫想するが如く經濟の發展を均衡的ならしめることが出来るであらうか。結論から言ふならば、彼の所論には餘りに非現實的な假定が多い爲めに之を實際政策として

2) F. A. Hayek, Preise und Produktion, 1931, S. 112—114. 116. 豐崎稔氏譯「貨幣と景氣變動」177—179, 182頁。

實施するならば恐らくは彼の豫期せざりし重大な反對の結果が生じ來るであらう。それでは非現實的な假定とは何であるか。こゝにその重大なものゝみを取り上げて見やう。

先づ第一に彼は貯蓄率と投資率とが一定であつて貯蓄額だけ投資せられるといふことが彼の所論の基礎となつてゐる。従つて彼の意味によれば、貯蓄によつて消費者の支出が減少したとしても、貯蓄は結局投資されて新資本財を増加し消費財の生産高を増加せしむるが故に、貨幣所得が同一なる限り、物價も之に應じて下落し經濟的均衡は攪亂せられるものではない。そして市場に於ける金利の存在は貯蓄が投資せられる即ち企業者によつて需要せられるといふ事實を證明するといふのである。

併し乍ら、Keynes を俟つ迄もなく、又こゝに詳論する迄もなく、貯蓄は個々の消費者の消極的行爲であり投資は企業者の積極的行爲であつて、現經濟組織の下に於ては貯蓄率を決定する人間と投資率を決定する人間とは別個の人格である、従つて貯蓄と投資が彼の前提するが如くに必然的に同一步調で進む換言すれば貯蓄と同額の投資が行はれるものとは言ふことが出來ぬ。

この論難に對して或は金利の變動を持ち來つて自からを防衛せんとするかも知れない。即ち貯蓄が投資に比して過多であるならば金利が下落しそれによつてヨリ低い貯蓄率で兩者の均衡が齎らされるであらう、又逆の場合逆のコースを経て均衡が生ずるであらう、故に結局貯蓄と投資の一致は否定することが出來ぬ、といふのがそれである。併し、ダービンに限り、かゝる論法を持ち來ることは出來ない筈である、何となれば、彼自

身に次の様な言葉があるからである。即ち曰く、「新貯蓄の供給が増加したにも拘はらず、その需要は増加しなかつたとする。……かゝる事情の下では金利が下落しなければならぬ。この下落は……新たな高い貯蓄率で新貯蓄の需要と供給とを均等ならしめるやうなものでなければならぬ。……このことを眞理であると主張する優れた多くの經濟學者がある……。併し私にはこの種の單純な均衡分析は不満足である。私と雖も第二期の均衡が齎らされ得るといふことはこゝで否定すべくもない……。併しそれは一般的不均衡の時期を通してのみ可能であると信ずる……。」と。されば、假令貨幣所得の安定を目標として通貨の統制を行つても、貯蓄と投資の不一致から生ずるところの「一般的不均衡の時期」を避けることは出来ない筈である。

更に又貯蓄と投資が同一の歩調を保つものとしても、尙貨幣所得の安定によつて經濟の均衡を維持し得るといふ議論には重大な前提が必要である、而してそれは資本蓄積の進行と同じ割合で生産の迂回期間が延長され得るといふことである。併し、資本の蓄積は主として經濟的條件に依存し生産の迂回期間は技術的條件に依存する、従つて兩者が同一歩調で發展するといふことは餘りに我田引水的な前提である。³⁾この點に關し、嘗ての機會に述べたことをこゝに再び引用しやう。「併し、生産の迂回段階は經濟的要求に従つて任意に延長され得るものではなく、そこには生産技術上の制限があります。故に若し經濟關係の要求する迂回段階に比して技術の許す段階が短かいならば何れかの生産段階に於て過剰生産、不況が生ずるのであります。⁵⁾」

故に之等の非現實的な前提の上に建てられた貨幣所得の安定策をそのまま現實の世界に移したならばそこに

- 3) Purchasing Power and Trade Depression, pp. 86—89.
- 4) D. H. Robertson, Purchasing Power and Trade Depression by E. F. M. Durbin in the Economic Journal, June, 1933. p. 282.
- 5) 前掲拙稿「通貨統制の目標に就て」12頁。

は必ずや期待に反する結果が招来するであらう。

之等の批判に對して最後に今一つの逃れ道を見出すかも知れない。それは、成程貯蓄と投資との不一致や資本蓄積と生産段階との不調和は短期間をとつて見れば出現するかも知れない、併し乍ら *in the long run* に於てはそれらの一致や調和が實現されてゐる、故に貨幣所得の安定は長期の政策としては價值あるものである、といふのがそれである。現に「これは長期の問題の解決に過ぎない」といふことを強調するのが肝要である……」⁶⁾といふダービンの言葉から判断すれば、彼自身さう考へてゐたものゝ様である。しかし、かゝる辯明者にはケインズの左の言葉の熟讀をすゝめやう。

Now "in the long run" this is probably true. But this long run. is a misleading guide to current affairs. In the long run we are all dead. Economists set themselves too easy, too useless a task if in tempestuous seasons they can only tell us that when the storm is long past the ocean is flat again.⁷⁾

結 語

以上觀て來た様にダービンの提案には種々なる理論的缺陷が含まれてゐる、従つて之をそのまま現實社會に適用することは出来ない。が、それにも拘らず我々は彼の意圖から或る一つの重大なヒントを汲みとることが出来る。それは何であるか。

6) Socialist Credit Policy, p. 24. The Problem of Credit Policy, pp. 100—112.

7) A Tract on Monetary Reform, 1924. p. 80.

概して従來の通貨統制策は——意識的に又は無意識的に——生産者、資本家の利益擁護を目指して進んで來た。物價安定主義は物價を安定せしめて生産費低下の利益を彼等に獨占せしめんとする。中立貨幣主義は彼等相互の分け前の均衡のために貨幣量の安定を主張した。すべて生産者、資本家本位の政策と言はなければならぬ。

然るに我がダービンは貨幣所得の安定によつて經濟發展の果實を消費者、一般大衆の手に與へんとするのである。こゝに通貨統制の目標を撰定するに際して考慮しなければならぬ重大な教訓がある。蓋し、あらゆる經濟施設の結局の目的は大衆の消費生活を豊富ならしめることに在るからである。(一九三五、八)